

博物館 Dictionary No.177

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

へいせいちしんかん てんじ そうげん どうしゃくじんぶつが
平成知新館2F-5(中国絵画)に展示されている「宋元の道釈人物画」について勉強してみよう。

「サイン」はどこに？

頭に「帛」という白い頭巾を被り、体にゆったりとした白い衣をまとして岩の上に坐る観音菩薩を描いた「白衣観音図」です。観音菩薩は、仏教で人が亡くなった後に極楽浄土に導く阿弥陀如来のお供をする仏さまで、他人を思いやる「慈悲」の心を表わしています。上質な絹の上に水墨だけで描かれたその姿からは、観音さまの優しさが伝わってくるかのようです。このような画を描くことができた画家の才能には、感嘆するほかありません。

さて、ここで問題です。この画を描いた画家は誰でしょうか？ 答えの手がかりは画の中にありますので、よく見てください（答えはこの裏にあります）。

ふつう、博物館の学芸員が初めて見る絵画の作者を知ろうとするとき、作品の端っこをじっくりと見ます。たいてい、画面の左右の端に画家の名前を記した「サイン」を見つけることができます。中国や日本の絵画ではこれを「落款」といいます。「落成款識」を略した言い方で、作品が完成した記念に書き入れた署名という意味です。

まず、遠くからこの画の全体を見ると、観音さまの頭の上に漢文の詩が書かれているのに気がつきます。縦書きですので、詩は画面向かって右側から始まります。最後の五行目に「天童雲岫」とあるのは作者の名前を表わします。しかし、この名前を画の作者のものと早合点してはいけません。これは漢詩を作り、画の上書き記した作者の名前です。絵画に合わせて書かれた詩を「賛」とよびます。

「天童の雲岫」とは、中国の沿岸部にある明州慶元府(現在の浙江省寧波市)にある天童山景德禅寺の住職をつとめた雲外雲岫(1242～1324)の



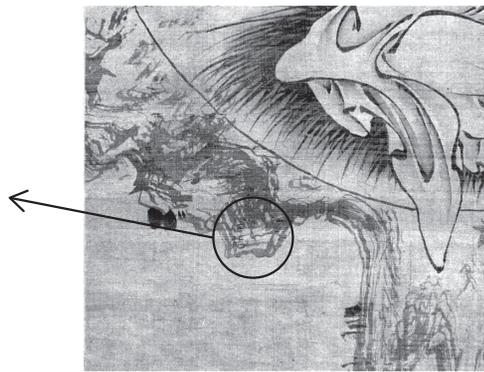
重要文化財
《白衣観音図》
正悟筆
雲外雲岫賛
京都国立博物館蔵

ことです。曹洞宗の宏智派の高僧で、鎌倉時代末期に来日して鎌倉の円覚寺や建長寺の住職となった東明慧日は弟子にあたります。雲岫が天童山にいたのは晩年の中国・元時代の至治年間(1321～1323)のことですので、この作品が一四世紀前半の中国で描かれたことがわかるのです。

それでは、答えの発表です。茸のような形をした岩座の傘の部分の左下側に「正悟」と読める二文字が見えるでしょうか。観音さまの右側の裾の端からそのまま下に視線を落としてみてください。台形を逆さにしたかのような岩の突起の左端に文字が書かれています。岩のごつごつとした表現に隠れて文字が見えにくくなっていたのです。これを「隠し落款」といいます。



この画を描いた画家の落款で「正悟」と読めます



隠し落款は、中国の宋時代(960～1279)にさかんにおこなわれた書き方です。宋時代の絵画の主流は山水の風景を描いた作品で、ごつごつとした山肌はもちろん、霧や霏といった大気の状態も忠実に表現しようとしてきました。画家たちのなかでも皇帝に仕える者もあり、芸術家としての自信も芽生えてきました。丹精をこめて描いた作品の世界を壊したくない。とはいっても、せっかく描いたのだから自分の名前を残しておきたい。この相反する画家の願いに応えたのが、隠し落款だったわけです。作品のなかの風景に小さく隠れるように書き入れているので、一見ただけではどこにあるのか分かりません。でも、見る人が見れば、画家の名前が分かります。そんな、「遊び」を楽しむのが「通」のやり方だったのです。たとえば、京都・大徳寺の塔頭の高桐院にある国宝の「山水図」は二〇世紀に宋時代の宮廷画家・李唐の隠し落款が発見されて、注目が集まった中国絵画の名品です。

残念ながら、この観音図を描いた「正悟」という画家の経歴は分かっていません。賛を記した雲岫と同じ浙江省の寧波にいたお坊さんの画家でしょうか。当時の寧波は中国でも有数の貿易港で、日本との交易の窓口になっていました。さらに、仏教が盛んに信仰され、仏画の一大生産地でもありました。日本人にとって当時の中国は最新の文化芸術の発信地であり、中国の絵画は大変貴重で、宝物のように珍重されました。寧波で制作された優れた仏画は今日も日本に数多く残っています。この画の作者「正悟」の謎を解き明かす未来の学芸員は、この解説を手にとったあなたかもしれませんね。

(美術室 呉 孟晋)